

想像界の生物相

人面有翼の天馬ブラク

早稲田大学講師 こばやし かずえ 小林 一枝



資料名 | ガラス絵 (天馬ブラク)

標本番号 | H0222913

地域 | セネガル

制作年代 | 1930年代

サイズ | 縦 26 × 横 33

※サイズの単位はセンチメートルです



資料名 | ガラス絵 (天馬ブラク)

標本番号 | H0222896

地域 | セネガル

制作年代 | 2000年

サイズ | 縦 37 × 横 53

※サイズの単位はセンチメートルです

◆◆ 預言者に乗せて天界へ ◆◆

偶像崇拜を厳格に禁ずるイスラーム世界には、聖画がない。しかしながら、預言者ムハンマドの肖像をはじめ、宗教関連主題の絵画は少なからず存在する。とりわけ「預言者の昇天（イスラー／ミウラージユ）」は好個のモチーフだった。

伝説によれば、ある晩、預言者は彼のもとにあらわれた大天使ジブリール（ガブリエル）に連れられてメッカからエルサレムに行き、そこから七層の天界をめぐる最上界で神アッラーに見えた後、七層の地獄をめぐる、一夜のうちに帰宅したという。このムハンマドの夜の旅に関しては、聖典『クルアーン』一七章冒頭の一節に短く述べられているにすぎない。後世により詳しい逸話となって伝えられ、モンゴル時代（イル・ハーン朝）以降は独立した『昇天の書』として挿絵付きの写本が多数制作された。

このとき、ムハンマドはアラビア語で「稲妻」を意味するブラクという天馬に乗って、エルサレムの岩のドームから天界へと飛翔したとされる。

ここに見られる二点のガラス絵に描かれているのは、人面有翼の天馬ブラクである。周知のとおりイスラームという宗教は、唯一神アッラーの崇拜のみを厳格に求めており、聖人や聖獣の崇拜を原則として認め

ない。したがって、預言者とその背に乗せて天界を旅した天馬であっても、ブラク自体が崇拜されることはないが、預言者を描くことに禁忌の念をいだく画家たちは、預言者をベールに覆われた姿や火焰状の光のみであらわしたり、ブラク単独で「預言者の昇天」を象徴したりすることもあった。

◆◆ 多様に描かれたブラク ◆◆

前述したように、『クルアーン』はムハンマドの夜の旅の詳細を示してくれない。より多くの情報を与えてくれるのは、預言者にまつわる伝承を集めた『ハディース』であるが、ブラクの姿形については、たった一行「それから騾馬よりは小さく驢馬よりは大きい白い動物が連れてこられたが、これこそ空を駆けるブラクであった」としるしている。（牧野信也訳）

つまり、雌雄の区別もここでは不明なのである。実際、ブラク画像の形成には、イスラーム以前の古代オリエントやエジプトの美術にあらわされた人語を解する合成獣の姿が反映されており、女性の上半身と馬もしくは驢馬の半身が合わさったケンタウロス型で描かれることが多かった。現存最古の挿絵（一四世紀）に見られるように、通常、人面獣ブラクの頭部には冠、前脚の付け根には二枚の翼が描かれた。イス

ラーム神秘主義において、預言者の昇天主題が好んでとり上げられるようになる、しだいにブラクの姿も、尾は孔雀、冠の頂部には羽根飾り、首や脚部にも装身具が付けられるようになっていった。

セネガルのガラス絵は、通俗的な土産物や西洋人蒐集家のための作品が主流となる以前、スナ派のムスリム芸術家（多くは神秘主義者）が、すでに東のイスラーム世界に流布していた宗教的な主題をガラス絵として描き始めたことが嚆矢であるという。それゆえ、昇天図も好んで制作された。これらセネガルのブラク画像は、二〇世紀に描かれたものであるが、イランやインド、またエジプト、シリアで流布していた版画やポスターの構図を手本とした痕跡がある。特にインドでは、ムガル時代以降ブラクの画像は単独で、豊かな女性の上半身とインドの国鳥でもある孔雀のキメラ（合成獣）として独特な形態で描かれた。右ページ下の一枚には、肩から広がった翼の背後に、イスラーム世界で魔除けとして用いられた「眼」が多数付いているが、孔雀の羽根の模様はよく見ると目の形をしているので、そこから発想を得たのかもしれない。透明なガラスの裏側に通常の絵画とは逆の着色手順で描かれた天馬は、ガラスを透過した光を受けて、その神秘的な輝きもいや増している。